

(2) 分野別エネルギー消費の国際比較

(GDP当たりエネルギー消費量の国際比較)

- 我が国の温室効果ガスの排出量のうち、エネルギー起源二酸化炭素が約9割を占めている。これはインベントリ上、産業、運輸、業務その他、家庭等に分けられており、大綱でも、それに対応して、基準量、目標量、特定年度における排出量を算定している。エネルギー起源二酸化炭素の排出量ではないが、GDP当たりのエネルギー消費量について、主要国との分野別比較をしてみると、家庭部門のエネルギー消費の割合が各国の中でも低いのが日本の特徴である。(図3、図4、図5、図6参照)。このことは、一世帯あたりのエネルギー消費の絶対量の比較からも裏打ちされている。(図7参照)

(エネルギー効率の国別比較の検討)

- 我が国は、全体として高いエネルギー効率を達成していることは事実であるが、具体的にどの分野のどの技術が、あるいはどのようなライフスタイルが高いエネルギー効率をもたらしているか、詳細な検討が必要である。我が国の製造業のエネルギー効率がどの程度高いかに関しては、個別製品ごとに生産量あたりのエネルギー消費量を比較することが最も実態に近いと考えられるが、その場合にも原材料やエネルギーの調達方法、生産している製品の構成が同じでないことに留意しなければならない。